

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第59回

森の彫刻家 上床利秋

一通の手紙

もしも学校において学生の一人が借金未納だが家にお金がないことを理由に教員に訴えても、個人で絶対に貸してはいけない。そういうことをしても、そのお金は返ってくるなど無いと思わなければならない。そんなことは皆わかっている。

先日自宅郵便受けの中に、どうやら直接差出人が私を訪ねて投函したのではないかと思われる一通の手紙が入っていた。

名前ですぐにそれは私が種子島に中学教諭として勤務していた時代の教え子だと思った。手紙には目立たない子供だったので私の記憶にはないかもと

書かれていた。そんなことがあるはずがない。今から34年前の3月の入試、卒業、転勤という慌ただしい世間の行事に揉まれて私は阿久根高校教諭として、彼は八代高専学生として分かれたままの記憶でとまっていたが、忘れずにいた彼の印象は特に強いものだった。

熊本県の入学試験という事で彼の入試には父親が付き添いとして種子島から現地に出かけたはずだったのだが、その地で父親は急病で死亡するという波乱に彼は遭遇したのだった。

なんとという不運の元に彼は生きているのだろうか。私は思い、しかしそれでも無事に入学試験を受けて合格できた彼の心の強さを労わってやりたい衝動に駆られていた。進学して熊本に行くまでのしばらくは親戚の家から中学校に通っていたのだった。

定のブロンズ像彫刻を制作中だったので、日曜日に彼を自宅アトリエに誘った。そして制作助手の勉強と称して彼に不慣れた石膏取りを手伝わせてみた。その時のお礼として渡したバイト代金が、彼にとっても有り難いものだったらしい。感謝の言葉が今回の手紙にしたためてあった。今、彼は都会の方で会社を経営して、立派な中堅社人。社長としてバイト生を起用することもあるという。時にはその人の境遇を鑑みて同じ施しをするのだという。それが私に対しての感謝の気持ちとして。

教員の大切な仕事は生徒を信じてあげること。勿論裏切られる思いをすることももある。そこに代償を求めものでもない。多くの若者たちとの出会いと別れの間、共通の思い出をつくるのが学校の仕事である。

数ある出会いと別れの中でもこういうかたちで感謝の気持ちを受け取ったとき、思い出を更に美しくしてくれた教員に特別な感謝の思いが芽生えた。

日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

御感想をお寄せ下さい。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索



バックナンバーも読むことができます。

我にいおうぞ

時過ぎて

後、悔やんで

どうしよう

過ぎ去りし事

前を見ようぞ

花咲かぬとも

実ならぬとも

文句を言わず

自然には自然のリズムがある

自然にまかそうぞ

物つかめぬなら

学つかめぬなら

何かつかめぬなら

つかもうと思おうぞ

思いて、やりのけて、つかも

我、我にいおうぞ



手紙を届けてくれたK君が15歳の時に書いた詩と筆者が当時の彼を描いた肖像

筆者が種子島の榕城中学校教諭時代、クラス生徒40名全員の自作による詩にそれぞれの肖像を添えて「緑の季節の詩人たち」として素描集にまとめた1ページ。

おおかたの生徒たちが公立高校受験準備するの、早めに進学先が決まった生徒には時間的余裕があるものだ。当時私は西之表市からの制作依頼を受けて赤尾木橋に建てる予